No.57

芥川だより

編集発行人 下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2－14－3
℡072－681－8870

発行日＊＊＊2011年5月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊

深い淵

川の流れが、くの字に曲がって大きな瀬にかかる手前の川上に、どんよりとした深い淵があった。地元の人は「ぼうず」とよんでいた。昔、失恋した若い僧が身を投げて亡くなった、という言い伝えが残っている。よどみの長さはおよそ二百㍍川幅は３０㍍位で深さは８㍍近くあったと思う。

鏡のような水面が広がっている「ぼうず」は、日照りの続く時でも満々と水を貯え水位を下げることはない。洪水の土砂で浅くなる事もなく、いつも変わらぬ不思議な淵であった。淵の岩岸から覗くと「ぼうず」の深い紺色の水面は底知れぬ怖れを感じさせ、飛び込むのを躊躇せずにはいられなかった。何か底に住みついていて、飛び込めば足に絡んで深い水中に引き込まれるのではないかという思いがいつも湧いて、友達がいる時は平気で潜れるのだが、ひとりだと怖くなって潜れなかった。

ある時、いつものように友達二人と「ぼうず」に潜っていると、静かな川底に鰻が油断しているように頭を突き出していた。引っ掛け針を近づけても逃げず幸運にも簡単に獲れたのだが、引っ掛けた後が大変だった。鰻獲りは逃げ惑う鰻を水面まで持ち上げるのが至難なのである。深い底での素潜りは耳に水が入り、水中めがねは水圧で割れそうになる。息も苦しくなり長くは底におれない。息切れして死にそうになった。えらく静かに流れる時間の中、鰻相手に苦闘した末、ようやく私は水面に出た。いつものように頭を振って耳に入った水を出したが周りの音はよく聞こえず、右耳は突発性難聴と診断され聞こえなくなってしまった。今もあの時の神々しい静かな時間は忘れられない。

「ぼうずは」、私にとってなんだったのだろう。

怖いが行かずにはおれない不思議な淵、幾度も潜って川底の様子は知っているはずの「ぼうず」は絶えず変化し言い知れぬ何かが宿っていそうに思えた。「ぼうず」に潜った帰りは私の心は静まり、家路に着くころには清々しい心地よい疲労感が私を包んでくれた。淵に住む水の神が私の気持ちを洗い清めてくれたかのように。思春期の私は心の闇にひそむ悪魔を抱えていて、「ぼうず」に潜む不思議な怖さがその悪魔な思いを抑えてくれていたのだろうか。私を「ぼうず」へ通わせたのは、心に渦巻く得体の知れない魔モノを抑える為の怖さを無意識に求めていたからかもしれない。私は「ぼうず」に畏敬の念を抱いていたのだ。（嘉）

連載　爺捨て山 30

梵店主

以前紹介したkさんが、いよいよこの夏天保山から富士山まで踏破する計画を実行される。先日kさんが面白い話をされた。

「歳も歳だし、足腰に自信がなくなってきた。それで皆さんに助けてもらおうと考えてます」

「伴走車でも付けられるのですか？」

「いや、そうじゃなくて、応援メッセージを皆さんからもらって、それをエネルギーに変えて歩き続けようと考えているわけです。宛先を書いたハガキを皆さんに渡して、頑張れと書いて投函してもらう、百枚でも千枚でも多くの人にお願いする。タダでは失礼だから、一枚につき五百円をお礼に差し上げる。」

「一人に五百円の応援駄賃を払うんですか、普通のカンパとは逆ですね」

「金はもって死ねないし、途中で死ぬかもしれない。皆さんの熱い応援メッセージで踏破出来たら、そのぐらいの金は安いものだ、と考えましてね」

「なるほど、いいアイデアですね。人から金をもらう発想から、応援してもらう人に駄賃を差し上げる発想は素晴しい」

「何枚か協力してくれませんか」

「よろこんで、お客様や知り合いに声をかけます。５０枚くらいはいけるでしょう」

読者の皆さんもご協力くださいませ。

《ヒマラヤへの道 20》

ガルムッシュ峰 12

梵店主

寝付かれずに、あれやこれや考えてみたが、よっちゃんに名案は浮かばなかった。由べえの寝息が聞こえるので、彼は寝入っているにちがいない。

よっちゃんは、小便をしたくなったので音を立てないように静かに、寝袋から抜け出してテントの入口のヒモを緩めて外に出た。

夜にもかかわらず、雲の切れ目から星の光があたりを照らしている。風もなく穏やかな天気で明日は行動出来そうな空模様であった。山の神に祈ったよっちゃんの願いは届かないかのように。

山での排便は難儀な事が多いが、幸い風もなくゆっくり用が足せた。吹雪の時などは、たまらなくツライ作業になるのだが今夜は快適である。タバコを吸って静かにテントの中に入って寝袋にもぐりこむ。

少し寝入って気がついて腕時計を見たら三時になっていた。よっちゃんは、昨夜の由べえの「もう登れません…」の言葉を幾度も思い返して、どうしようかと思ったが、天気も悪くならなかったし、どうすることも出来そうにないので、とりあえず三時半になったら起床して朝飯の用意をすることにした。後は由べえ次第である。

山の起床は絶対守らなければいけない。少しでも遅くなったら、その日の行動が大きく狂ってしまう。たとえ半時間でも遅くなると雪や氷の状態が緩んで危険が増すことがあるからだ。特に標高が高く空気が薄い中にあって何が起きるか見当がつかない。

よっちゃんは、いつものように由べえに「由べえ、朝やど！ 起きろ」と声を掛けた。由べえは、朝起が弱い体質だから、すっと起きる事はめったにないのだが、その日は違った。彼は、すぐに寝袋から出て、小便をするために外へ出て、ついでに水を作るための雪のブロックが入ったナイロン袋を持ってテントに入ってきた。テントの中は狭くわずかなスペースでコンロを炊き湯を沸かすが沸点が低いから低い温度で沸騰する。今朝は、日清の焼きそばとお茶だけである。毎度のことなので要領よく作って食べる。茶を飲みながら、ポンペで食べた容器を丁寧に拭きしまう。そして由べえとふたり一緒にタバコを吸う。タバコの味は変わらず美味い。

よっちゃんは、タバコを吸いながら由べえの顔を見た。よっちゃんが心配して眠れなかった事がバカバカしいように思えるいつもの由べえの表情があった。

「由べえ、今日の装備の分担はどうする？」とよっちゃんが声をかけると。

「よかったら、ぼくトップで行きますよ」と昨夜の落ち込んだ由べえとは全く違った様子である。言わずとも今日がどんな日になるのか互いに分かっている。天気さえ持てば、ルートは伸ばせる。そうすればピークに登れるかもしれない。いや、なんとしても登りたい。初登頂の栄誉をつかみたいと二人とも思っている。

登山とは自己満足の極め付きみたいなところがある。最後の頂を踏む事への思いは大変強い。ましてヒマラヤの未踏峰に初登頂するとなると、人生に二度とない夢のようなことに思えてくるのである。「腕の一本ぐらい折っても登ったるぜ！」そんな高揚した緊張感に包まれていた。

よっちゃんは、由べえのトップで登りたい、という言葉で昨夜から心を覆っていた暗雲が消え、ドスカ天になっていた。

よっちゃんは、疑った自分が情けなかった。長年共に登って来た由べえを疑心暗鬼に考えた自分が、先輩として申し訳ないと思いながら、装備を点検しだした。

義兄とその家族（16）

前号が出るまでに、福島の原発問題はケリがついている、と思い込んでいた。しかし、震災から1カ月以上経った今も、終息の気配がないどころか、より危険になっている、という専門家もいる。わが家の場合、肺ガン闘病中の義兄が福島県のいわき市の出身で、義兄の身内の多く、お父さん、お兄さん夫婦、お姉さん一家等々がいわきに住んでいる。余震とみられる大きな地震もあって、義兄はさぞかし心配していると思うが、その心配に、義兄の嫁である私の姉「キョーフのねえちゃん」が立ちふさがっている、ような気がする。姉にはケイベツされているのだが、私はこういうとき、たとえ電話の一本でもして「大丈夫ですか？」と尋ねるのが、社会生活上のマナーだと思うタイプだ。だが、姉はフンと鼻をならして、「アンタ、そんなん聞いてどないすんのん。邪魔なだけやろ、何の役にも立てへんのに」と言い捨てる。

おためごかしがない、正義のねえちゃんなんですよ、と自慢する気にはなれない。やっぱり、こういうときは、姉にキビキビといわきのお舅さんやお兄さんたちと連絡を取り、水や食料、電池や一時の慰めになるような甘いお菓子、それにお見舞いのお金のひとつも送るなり届けるなりしてほしい。だが、ウチの姉はそんなことしようともしない。

「何を送るのん？ 向こうはお金持ちやん

か。家かて、昔の大工さんが建てた立派な家やから、ビクともしてへん。まあ、ウチの家やったら、ペチャンコやったやろうけどな」と、お見舞を送る気も手助けに行く気もサラサラない。日本中、いや世界中の人々が東北に手を差し伸べようとしているのに、そこに親戚がいるのに、姉は知らん顔を決め込んでいるのだ。

義兄の両親は太っ腹で、その昔、義兄と姉が家を建てたとき、当時のお金で大枚5百万円をポンと出してくれた。カネは出すがクチは出さない、本当に善良なご両親なのだ。

その後、お母さんが亡くなったときは遺産分けで、確か3百万円だかをもらったと言っていた。「そんだけ援助されているんだから、この機会に少しはお返しを」と思うのがフツーだと思うが、姉はフツーの人ではない。日本中に充満している「がんばろう！日本」の精神など完全無視の構えだ。

そんな姉だが、ひとつだけ確かなことがある。これが自分の妹（私）や弟一家が被災者だったら、震災の次の日には駆け付けてくれているだろう、ということ。車にギュウギュウに蒲団やら毛布やらリンゴやら米やらパンやらありったけのモノをかき集めて来てくれるに違いない。それで、自分が帰るときに、こう叫ぶような気がする。「放射能が降り注いでるかもしれへんのに、こんなとこにおったらアカン！　一緒に大阪に行こ！。もう大阪で住みいな！　仕事なんか何とでもなるやん！」。

なのに、義兄のお父さんやお兄さん夫婦のことなんか、まるでどうでもいい、という感じで「（長男の）お嫁さんと子どもらは栃木の親戚のうちに避難したらしいわ」。安心したというより「お父さんとダンナを置いて薄情や」と言わんばかり。

いつも思うのだが、まったく極端な性格のねえちゃんである。

「アンタは体裁つくろってるだけや」と姉に言われるのはわかっているが、震災から1カ月も経って起きた余震が震度6で、その震源地が「いわき市浜通り」とニュースで流れたとき、さすがに姉の家に電話した。そして「義兄さんにかわって」と言ったら、姉は「いま、余計なこと言わんといて。私から、アンタが心配してメッセージくれたで、と言うとくから」と取り次いでもくれない。

「だって、いま余計な心配したら、体に悪いやろ」って。そんなのおかしい。多分、義兄は福島に行きたがっていて、姉が断固、行かせたくないのだと思う。だから、私が義兄の味方になって「そりゃ、行かなあかんと思う」などと私が言って、義兄がその気になるのが姉はイヤなのだ。あんまりな鬼嫁だ。

私は義兄の援護射撃のつもりで、「ねえちゃん、言うとくけど、（義兄が福島に行くと言うのを）止めたらアカンで。行きたいと思ってはったら、行かせてあげや」と釘を差した。そしたら、姉は「アンタ、自分の夫じゃないから、そんなこと言うねん」と反論してきた。「だって、大事なときやもん」。放射能を浴びて、再発したらどうしてくれるねんと言いたげな姉。健康オタクだから、放射能を極端に恐れているだけではなくて、「いまみたいなときに被災地へ行ったら、コンビニ弁当みたいなモンしか食べられへんやろ。せっかく、食養生してんのに」。

そう、姉の心配はそこなのだ。姉は自分がコンビニ弁当みたいなものを食べるのはそんなに苦になるわけではなくて、柏原の田舎にローソンができたとき、すごく喜んでいた。「おにぎり、すごくおいしいねん」。市田ひろみだかが宣伝をしていた、こだわりおにぎりのことだ。だが、そういうモノを義兄が食べたら、その瞬間にガン細胞が暴れ出すと思っている節がある。だから、義兄にはキノコたっぷりの減塩味噌汁やらブルーン入りのヨーグルトをせっせと食べさせ、姉自身は甘いパンなんかをペロペロ食べている。「たまには、ええねん」。義兄のために、有機や無添加の高価な食材や食品を取り寄せているのに、それらはほとんど自分は口にしないで、「私はライフ（近くのスーパーだ）で買うたもん食べてる」と言う。お取り寄せは結構、手間ひまがかかるし、値段も高いので、「二人で食べたら減るやろ」。私の姉はすっごく良い人なんだろうか？　それとも――。（AO）

二万をはるかに超える人々が亡くなった。七割、八割の児童が犠牲になった小学校もある。そういう数量の多さで被災の深刻さを理解する仕方ではけっしてとどかない深い悲しみの中、絶望の淵に置かれている人々がいる。親を亡くし、子を亡くし、友を目の前で失った、具体的な一人一人の死と向き合わざるをえない被災者である。

そんな人々の上に容赦なく死の灰を振りまいているのが、いまも暴走をつづける原子力発電所だ。この放射線汚染物質は、幼い生命にたいしてより強力に毒性を発揮する。原発を動かすことによって生み出される放射能という毒は、いまや膨大な量にのぼり、遠い未来の世代も犠牲にするかもしれない。原発の悪魔性たるところだ。

「芥川だより」は反原発、脱原発の立場にたって、さまざまな問題や情報を発信したいと思います。

★緊急特集★

【原発は悪魔だ！】

子孫から恨まれる我ら

遊興享楽の極みを尽くし地上の資源を貪欲にむさぼり、あとは野となれ山となれ、と無責任に開きなおる。少しの反省も時間が過ぎれば元の木阿弥になってしまい、人間の業がなせる事であって、個人があらがえない大きな流れとあきらめ、個人としての自責から逃れるのである。誠に勝手な生き物で、自分達の今が良ければいいのである。

北陸自動車を走るたびに心配する事がある。通行台数が少なく、維持管理の費用を将来捻出する事が難しいだろう。山中を走る高速道路ゆえにトンネルが多く一ヵ所でも通行出来なくなれば、道路の機能は瞬時に失われてしまう。廃路にしないためには補修し続けていくしかない。

先日、建築土木業で成功した先輩の葬儀があった。千人を越える参列者の中には、高名な政治家や大学の先生方もいた。豪華に飾り付けられた祭壇や会食会場から葬儀にかかる費用の金額が気になった。ここにいる人達は、多かれ少なかれ故人から何等かの便宜を受けたに違いない。その金額の大きさが反映していると思えた。道路などの公共事業は大きな仕事を生み出し関係する人も多い。どんなに高尚な事を言っていても物欲には負ける。金や酒には弱いのだ。

今回の原発事故は、一切の屁理屈が通用しない緊急性を持つ人類の未来を左右する大事故である。しかしながら、世間の人はそこまでの自覚はないようだ。将来の事より今の生活に追われ、目先の損得の勘定で頭が一杯なのである。百年先に思案を巡らし、子孫のために礎となるべく人生を生き抜く人は見当たらない。原発関係者の人であれば、原子力の怖さを知っていたはずである。その怖さをマヒさす甘い誘惑があって、原発の恐怖を無視してきたのだろう。そのつけが今、目の前に誰もがわかる姿で現れた。東大を出て優秀だと思っていた学者や技術者が如何に無責任で姑息な人間であったか思い知った。政治家や、新聞やテレビのマスコミは東京電力から多額の宣伝広告費の金に目がくらみ良心が汚染され腐ってしまったかのように、太鼓持ちに明け暮れする。事故の本質をぼかし、責任をないがしろにしようとする姿勢に唖然となる。

事故直後、私は原子力発電に関係した先輩に電話をして意見を聞いた。彼は事の重大性に気づかないかのように「原子力技術には問題はない。ただ、耐震基準が少し甘かったなあ」と言う。「汚染物質の処理は未解決だし、現代進行中の原発核容器にある核燃料が溶け出し臨界になり爆発の危険性があるのではないか？そうなれば関東一円放射能で汚染され住めなくなるのではないですか」彼曰く「そんな心配はない。原子力工学を学んだ専門家の技術者が数百人からいて対応するから、大事にはならない。大丈夫だ」

私は、自分の危機感とあまりに違う先輩との感じ方にこれ以上の問答は無用と思い電話を切った。たぶん大方の原子力関係者は今回の地震発生時、福島の原発がこれほど大きな問題になるとは考えていなかったにちがいない。

しかし、原発の危険性を４０年前から訴え続けてきた京大原子力研の小出さんは、当初より事故の緊急性・重大性をネットで発信し続けていたが、マスコミには無視され続けた。反原発は、電力会社にとって大変困ることであるからだ。独占的に電力を供給し価格を決め極めて安定した利潤を上げるシステムを壊されたくないから、政治家やマスコミ・学者などに寄付をし続け世論を歪めてきたのである。正しい情報が開示されれば、ほとんどの人は原発に反対するからだ。今、我々は原発の恐ろしさを知ってしまった。これまでの無知な私達とはちがう、もう黙ってはおれない。数百年単位といわれる放射能汚染を許したら、ほんとうに日本は誰も住めない無人の島になってしまう。（嘉）

気分が晴れない原因は？

明石幸次郎

このところ、毎日、気分が晴れないのは、私だけではなさそうですが、この原因は阪神タイガースの調子が今ひとつということだけではありません。

主な原因は、この度の大震災で大変な被害を受けて、避難所で不自由な生活をされておられる大勢の方、又、今だに行方不明者が１１万人を超えていることを思うたびに気分が滅入ります。更に、東電福島原発事故（災害）がどの程度の被害で収まり、解決が見出されるかが今のところ不透明で、福島原発のニュースを聞くたびに不安に駆られ、何か落ち着かなくなり、気が晴れません。この前、放射線量の放出が管理され、大幅に抑制されるまでの対応策として、九ヶ月間の工程表なるものが、発表されましたが、この工程表通りに上手く進むとしても１年近くはかかり、一旦放射能で汚染された土地で農業、牧畜を再び営めることになるのは、数年先になるか、汚染具合によっては、不可能な所も出て来るとのことです。避難された方々は、地震でやられ、津

波に打ちのめされ、更には放射能汚染の心配をしなければならないという三重苦の苦しみを味わされ、気が滅入るのを超えた想像を絶する思いをされておられるのでしょう。

考えたくはありませんが、もし、この工程表通りに上手く行かずに放射能の放出が続き、更なる避難地域の拡大が広がれば、大変な不安要因になってしまい、国力低下の一途を辿ってしまうのではないかと心配します。

ここは、何とか、原子炉をコントロール出来るように復旧させて、放射能の飛散が広がるのを防ぐ対策、実作業に従事されておられる現場の方々の健闘を祈るのみです。日本の本当の底力は、製造工場、工事現場、農業、漁業、何処へ行ってもそうですが、第一線の現場で働いている人達にあります。仕事に対する責任感、使命感と誇りのようなものが身体を使って現場で働いている人にはあります。今回も原発の現場で働いている人にもそれが多いにあるようなニュースも聞きます。それに比べ、今回の事故（災害）でのトップの対応に非難が出ていますが、東電のような役所的な体質の組織では、万事が前例、慣例に忠実で、計数に長けて、有名大学出で、根回しが上手く、上に忠実なタイプの社員しかトップになれません。このタイプのトップは、平時で予想させる課題に対しては周りの力を借りて対応することは出来ますが、今回起きたような想定外の戦争に近い大問題が発生した場合は、現場経験の苦労、修羅場を踏んでないだけに、行動、判断に問題が生じるのは当たり前で？背負うがないことです。これは、現場社員の底力でカバー出来るので、東電のトップは背負うがないで済ませられますが、この日本の戦時の状況を解決に導く、政治を担うトップの菅さん力不足は誰がカバー出来るのか？これが最も大きな不安要因、気が晴れない最大の原因かも知れません。

ゴマメの激しい歯ぎしり
～ナメるなよ、東電～

4月中旬、「芥川だより」の編集長からこんなメールが届いた。

「いまごろ気づいたのですが、原発はとんでもない代物です。止めてもらわないと、日本が無人島になりかねません。ここはひとつ、人間魚雷で体当たりする覚悟で『原発やめてーな』（適当な題目を考えて下さい）。ささやかな抵抗ですが、掲載し続けたいと思います。ご協力お願いします」

これだけのメールなので、編集長の意図が完全に理解できているのかどうかわからなかったが、思わず返事メールを送信してしまった。「原子力発電のことなど何も知りませんが、東電のエライさんたちをどやしつけてやりたいとは思っていました」

そう書き送ってから気がついた。編集長の言う「人間魚雷」って何だろうか。ひょっとして、原発反対を唱えたら、かつて、戦争反対を唱えた人々のように白い目で見られるのだろうか。日本の経済発展に水を差すつもりか、とか産業をズタズタにするつもりか、とかボコボコにされるのだろうか。それならば、望むところだ。私は世界の中心、ではなく「芥川だより」の中心で、はっきり叫ぶ。「地震の多発国に原子力発電所は危険すぎるやろ！」。

■放射性廃棄物は未来へのキョーフの埋蔵物

自慢じゃないが、原子力発電所のことなど、なあんにも知らない。だが、何かおかしいよね、ということぐらいはわかる。昔からわかっていた。私は福島の第一原発が津波に襲われる前から原発反対派だ。廃棄物の処理に苦慮するようなもん、初めから作ったらアカンわな、と思っていた。地下3百メートルだか掘って捨てている、だから安全だなどとテレビのCMで流しているが、自然に土に返るわけではないから、いつか、何万年後かは知らないが、地殻変動などがあったとき、未来の人類に、そのときの地球の生き物にどんな酷い惨禍をもたらすかわかったもんじゃない。人間は勝手や。そんなものを地球に捨てていいと、何で思うんだろうと不思議だった。

それに、東京や大阪の人口密集地に原発を建てられないということは、基本、安全ではないということだとも思っていた。ホンマに安全だったら、電気を使うところに近いところに建てる。「人口密集地に建設したら、万が一のとき、大惨事になるじゃないか、バカ」ってか？　それはつまり万が一のとき、人口の少ない福島の人や福井の人なら犠牲になっていいということ？そんなばかなことがあってたまるかだ。でも、一方で…。電気代が高いのは困る。

火力発電で盛大にCO2を排出して、気候が変動するほど地球が温暖化するのも困る。やっと書いた原稿が、急な停電で消えてしまったら、最悪、困る。そして諸外国、たとえばフランスなどに「わが国ではクリーンなエネルギーを原子力発電所で効率良く生産しています」などといわれると、「ええっ、いいなあ。日本は遅れてるなあ。いつまでも、火力発電でもないだろうに」と思ってしまうであろう自分もいる。だけど、原発はダメ。

津波が来ようが来まいが、原発はダメ。なぜかって？　通常時でもメンテナンスをする人は電力会社の社員ではなくて、下請けの下請けさんで、その人たちの生命は保証されていないからだ。その分、高いお手当てをもらうのだが、そんな非人道的な仕事が派生するような施設を作ること自体、変だと思わないのだろうか。背中に刺青があって、まともな職につけなくて、自暴自棄、「原発で働けばいいカネになる」。そんなニイちゃん、おっさんでも、被爆したり、発ガンのリスクが極端に高くなるようなむごいことがあっていいはずない。

だから、原発は最初からダメだと私が言ってるのに、誰も聞いてくれない。作りに作って54基だと。知らなかった。いつのまに、そんなにたくさん…。

■いくら「想定外」でもそれはないでしょ？

ここから、ちょっと話が変わるが、東電って、社員はみんなバカばっかりなのだろうか？　聞いた？　あの社長さんの謝罪会見。こんな、世界中を危機に陥れるような、えげつない事故の責任者なのに、何なの、あの心のこもらない謝り方は。原稿の棒読み。記者の質問にも、誠心誠意答えているというより、「そんなことをいわれても、困るんだよ」といわんばかりの不機嫌モード。

ふと思い出したのが、かつて山一証券が倒産したとき、「社員は悪くないんです！」と涙ながらに叫んだ社長さん。どこかしらマヌケっぽくはあったが、人間味が豊かだった。苦悩が目に見えた。清水社長の苦悩は、あの社長さんのざっと三億倍でなければいけないのに、その苦悩が表れておらず、「私個人のせいではない。この原発は40年前のもので、そのとき、私は社長ではなかったんだよ、わかってるのかね、キミ」とでも言いたげな冷たさがある。

冷たいうえに、聡明さがない。はっきりいって、今回の事故で、東電のマヌケぶりがよくわかった。「水を入れているんですが、なぜか溜らない」。私ら、一般ピープルでも、水を入れて溜らなかったら、「どこか漏れてる！」と思うよ。水素爆発が起きたときも、最初は「何が爆発したのか、どこが爆発したのかもわからない」と言っていたもんね。もちろん、被爆の危険性があって、近づけなかったのはわかっている。それだけ切迫した状態だったのも理解できる。それでも、いちいち「それはないよ！」とツッコミを入れたかったのは、私だけなんだろうか。

冷却のための水、その目的を果たした後、今度は捨てないといけないということぐらい、最初からわかっているのに、うろたえている。当然だ、放射能で汚染された水だもの。

その汚染水を吸着させるのに、最終的には「水ガラス」とやらを使ったけど、その前は古新聞とオガクズだって。これまた、頼りない。水の流れをつかむため入浴剤を使っていたが、あのせっぱ詰まった会見場所で、「入浴剤を入れたところ…、市販の入浴剤です」って。バスクリンかいな？　頼りないにもほどがある。津波と爆発でガタガタになっているといっても、一応、原子力発電所ではないか。そこの事故現場処理の場で使われているのが、市販の入浴剤というのが、何だかなあ。それが最高に有効なのだとしても、せめて成分名で言ってほしいと思うのは私だけか？

■事故現場の作業員は英雄だ！

思いっきり、茶化してしまったが、実は心のどこかで、福島の第一原発の事故現場で働いている人たちには申し訳ないと思っている。東電の社長や、東京で仕事をしている社員たちには、もっと悪口を！　ぐらいに思っているが、現場の作業員の人たちは別だ。

東電の社員さんや下請けさんや、今回急遽、雇われた人やいろいろだと思うが、彼らには心から頭を下げたい。「ありがとうございます」と言いたい。大げさでなく、私たちの命は、いま彼らによって守られている。

私たちだけではない。ひょっとしたら、世界中の人たちの命を守ってくれている。英雄だ。チリの地下炭鉱で生き延びていた人たちを英雄だといっていたが、私は、あの人たちより、いま、福島第一原発で働いている人たちの方がよっぽど英雄だと思う。多くの人の生命を守るために、あの恐ろしい現場に踏み止まって働いているのだ。

それなのに、東電は、その職員の寝床もきちんと用意せず、食事もロクな

ものを出していなかったらしい。「あの状況だから仕方がない」と言い訳ができるのは事故からせいぜい3日だ。それぐらいは着のみ着のままで、食事が十分でなくても仕方ないのかもしれないが、それを過ぎれば、現場を甘く見ている、ナメているということだ。

第一線の作業員の命などどうでもいいという体質があるから、こういう事態に陥るのだ。

■怒りマックス、沸点超え

東電（現場の人を除く）に対する怒りマックスになっていたが、マックスには上があることを知った。

テレビを見ていたら、またあの東電の社長さんが出ていて、「原子力損害賠償法第3条」がどうのこうのと言っているではないか。それは、「賠償責任は一義的に当該原発を運営する電力会社が負うが、異常に巨大な天災地変または社会的動乱による場合は、事業者を免責する」という項目があって、今回はこれに該当するのではないか、みたいなことをのたまわっていた。ふざけるのもほどほどにしろ。さっさと、福島県民に賠償しろ。このままだと、日本中いや世界中の人々から、賠償請求されるぞ、東電！

ここまで書いて、文章を締めるつもりだったが、今日の朝刊の一面に「首相、東電の免責否定」という見出しが踊っていた。当たり前だのクラッカーだ。

ついでに、もう一つ。福島では牛が牛舎につながれたまま、餓え死にしかけている。もうたくさんの牛が死んでいるけれど、つながれて死を待っている牛たちのことを思うと胸がつぶれる。町をさまよっている犬や猫。暗い鶏舎の中で死ぬこともできずうごめいているニワトリたち。そういうニュースの一つひとつに東電の社員は、少しは責任を感じているのだろうか。責任を感じているなら、エサをやりに行け！少なくとも、やりに行こうとしろ！

はたして、東電の社員は福島の人たちの苦悩や苦労をどこまで、自分たちの問題として受け止めているのだろうか。悪魔のような性格の私は、こんなことも思っている。東電の社員の家は、広さに応じて、避難民を受け入れろ！　休みを返上して原発周辺へご遺体を捜しに行け！　少なくともアンタたちには防護服が支給されるんだろうから。

そういう「自分たちの責任だ」という意識が少しはあるんですか、東電社員の皆さん。

原発は一社員の問題では確かに、ない。でも、これは人間の起こした事故だ。社長さんは「津波のせいだ」と言うだろうが、原発を作った人間の責任だ。そこのところを認識せずに、原発大国・日本の明日はない。（人間魚雷1号）

魔物の正体

地球がひと噛みした歯ぎしりで暴れ出した魔物は、容易に鎮まりはしない。みずから発した熱でみずからの身を溶かし、猛毒を発散しつづけている。ひと月以上経ったいまも収束にはいたっていない。

よしんば、この魔物を制御できるようになったとしよう。それでも安心はできない。封じ込めて眠らせても、放射能という毒は消えないのだ。いつまた、地震あるいは津波、人為的ミス、事故などによって放射能が漏れ出すか誰も保証などできない。放射能の危険がなくなるまで何百年も監視しつづけなければならない。

放射線は生物の遺伝子を傷つける。しかも細胞分裂が活発な子どもや幼児ほど影響を受けやすい。生きとし生けるものとは共存できない猛毒である。そんな猛毒をつくりだす原発は危険きわまりない魔物なのだ。

百万キロワット出力の原発一基で、核分裂によって生成される放射性物質、すなわち死の灰は一日三キロだという。広島に落とされた原爆によって生み出された死の灰は八〇〇グラムである。福島第一原発だけで六基、日本全体で五四基あるので、毎日生み出される死のゴミは膨大になる。この原発のゴミは六ヶ所村に集められ、いまや三〇〇〇トンにもなる。

日本は唯一の被爆国だといって、広島、長崎の悲惨さを強調する。たしかに原爆の威力は凄まじく、その劫火は瞬時に人々とともに街を焼きつくした。地獄絵図のような悲惨な状況が強調されるいっぽうで、直爆からは免れたものの放射線被曝に長年苦しむ人々は置き去りにされた。

原爆直後に広島に入った人々はやがて不調を訴えるようになる。死の灰を吸い込んだり、付着したものを口にしたりして、体内に放射線汚染物質を取り込んでしまった人たちである。内部被曝といわれる。異常な倦怠感から始まり、発熱、下痢、紫斑、脱毛、出血、死にいたる。個人差があって、十年以上経ってから発症する例もある。

チェルノブイリ被災地で医療支援を行ったことのある松本市長の菅谷明は、外部被曝については研究が進んでいるが、内部被曝についてはよくわかっていないという。体内に吸収され、組織にいったん取り込まれると、排出されにくく、微量でも放射線を出しつづけるため、ＤＮＡを損傷して、ガンを引き起こす。政府や電力会社が「低レベルの放射線で、直ちに影響が出るわけではない」というのは、外部被曝のことである。

低レベル放射線物質が内部被曝した場合、直ちに影響が出ることもあるが、多くは何年も経ってから影響があらわれる。

外部被曝の場合だが、やっかいなことに、低レベルの放射線を浴びることによって細胞が活性化し、抗酸化機能が高まって、体にはよい影響を与えるというホルミシス効果なるものがある。原発推進派の人は好んで取りあげる現象だが、よい影響があると結論づけられるほどデータは十分ではない。長期的には有害かもしれないのだ。

原子力を推進する立場に共通するのは、放射線には閾値（しきち）があるということだ。基準値というものがあって、それ以上は危険だが、それ以下は無害だという考え方である。推進派にとっては、閾値はなくてはならないものである。閾値がなくゼロ以外はすべて有害、すなわち許容量がないということになれば、原子力そのものの存立が危うくなるからだ。

ＥＣＲＲ（ヨーロッパ放射線リスク委員会）や米国科学アカデミーのＢＥＩＲ（電離放射線の生物影響に関する委員会）は、そういう閾値は認めない、つまりどれほど低レベルの放射線でも人体には有害であるという立場に立っている。放射能というものはいくら線量が低くても、危険なものだと認識したほうがいい。

原子力推進派は、微量の内部被曝ならば、人間本来もっている防御機能が働いて、危険はないと強調する。ところが、微量であっても、生命体に取り込まれると、濃縮されて線量は飛躍的に増大することが明らかになっているのだ。そして、甲状腺や骨、筋肉、臓器に沈着して、放射線を出しつづけるのである。また、低線量放射線を長時間照射するほうが、高線量放射線を反復照射するよりも容易に細胞膜を破壊するという実験データもある。そういう都合の悪い知見は、科学的であっても彼らは無視するのである。

原子力発電所は、生命とは共存できない放射性物質や史上最悪の猛毒といわれるプルトニウムを産みだす装置である。今回の事故のように放射能で土壌や海を汚染してしまったら、浄化する方法はない。熱と放射能を放出しつづける使用済み燃料を密閉できる容器などない。原発が産出した毒を百年単位で管理しつづけなければならない。危険な核のゴミはたまるいっぽうなのだ。原発を使いつづけるということは、膨大な核のゴミをわれわれの子どもや孫の未来に押しつけることになる。

今回の地震が起こった後、経団連の米倉会長は「原発は津波に耐えて素晴らしい、原子力行政はもっと胸を張るべきだ」、「東電は甘くなかった」とうそぶいた。放射能の漏洩があり、一号基の爆発があった後でもだ。与謝野経済財政相は、「今後も日本経済にとって、電力供給にとって、原子力発電は大事だ。原発を推進してきたことは、決して間違いではない」

「原子力は必要なエネルギー源」と述べた。中部電力のＣＭに出演していた評論家勝間和代はテレビの討論番組で「放射性物質がじっさいより怖いと思われていることが問題」「今回の原子力の問題でも、死者が出ましたか？」と発言している。原発がこれほど深刻な状況に陥っていても、したり顔で原発を擁護する彼らには吐き気をもよおす。

こんどの原発事故がわれわれに気づかせたのは、無駄とも思えるエネルギーを大量消費しながら生活していることだ。夜の東京を歩くのにサングラスが必要だとフランス人に皮肉られるほど、街を明るくする必要はなかろう。屋内でセーターを着こむほどクーラーを効かせる必要もあるまい。

原発がなければ大幅に電力不足に陥る、経済を停滞させないためにも原発を止めるわけにはいかない、真夏の電力不足は原発なしでは乗りこえられない、夜の街は治安保全のためにも明るくしたほうがいい、家庭ではオール電化にせよ、煽られるように電気を消費し、原発の必要性をすり込まれてきた。

生活スタイルを見つめ直し、ゆっくり考えてみてもいいときではないかと思う。つつしみのある暮らし方、たしなみのある身の営みというものが文化として日本にはあった。そんな昔の生活に帰れというのではない。煽られるがままに過熱気味になるのではなく、つつしみのある消費の仕方があるのではないかと思う。景気は多少悪くなるかもしれないが、エネルギー大量消費の暮らしを転換しなければならないと思う。

原発の存在を容認してきたのはわれわれ自身でもある。世論調査によると、これほどの事態に直面しているにもかかわらず、「原発の現状維持、増設」支持が四〇％をこえている。この数字は何を物語っているのだろう。無知なのか、他人ごとなのか。いま、原発はその悪魔的容貌をあらわにしているではないか。

原発問題を考えるとき、地球的広がりと未来の世代にまで見据えた視野が不可欠だと思うのだ。福島原発事故のように大気中や海に洩れ出た放射能は、国境を越えて汚染が広がるのである。原発が生み出す膨大な核のゴミはますます増えつづけ、三〇〇年先の遠い未来の世代まで危険な毒の管理を担わせることになる。

原発は必要悪なのではない。絶対悪である。（猿）

幻影

具志　清

高井は、いつものカウンターではなく奥のテーブル席の片隅を占めた。生のジョッキを飲み干し、コップの冷酒を追加した。

京子の手紙を再び開いた。

母は嵐山での父との最後の日、天龍寺大方丈の縁先に共に座し、曹源池庭園を眺めていた時、この詩を贈られました。

「昨夜、こんな詩が出来たんだ」と父はポケットから一枚の紙を取り出しました。

「あわれ　比叡の霧深き山路…」と母は小さな声で終わりまで朗読しました。

「いい詩だわ、いつ登った時のこと？」

「いつと決まった日ではないが、自然に頭に浮かんだ」「君って、誰のこと？」

「勿論、香織さんのことだよ」「嬉しいわ、名詞ね」「はっは、名詞なんてものじゃないが」

二人の間にこんな会話があったようです。母は、この詩の書かれた紙を折り畳んで自分で作ったお守り袋に入れて戦後の二、三年は肌身離さず持ち歩いたそうです。「母さんをいろいろな誘惑から守ってくれたの」と言いました。

母は、わたしの行く末を案じながら亡くなりました。わたしの破談も自分所為にして落ち込んでいました。それが親心というものでしょうね。余りにもひどいので、わたし怒ったことがあるのですよ。親の心子知らず、ですね。でも、わたし、男はもうこりごりです。達観しております。女には一人で生きて行き、独りで幸せを掴む力がある。と思うのです。男性の高井様にこんなこと言って、ごめんなさい。

母と二人の時は、お休みの日には、たまには映画を観に行ったり、郊外へ出掛けたりしたのですが、一人になってからは出無精になりました。最近は、お部屋の中で本を読んだり、お針仕事をしたり、外に出るにしても、近くの小公園や運河のほとりをぶらぶらするだけです。

母は、京都で暮らしたい、とよく言っておりました。東京はあまり好きではないようでした。長年お世話になった街ですから、そんなこと言ってはいけないのでしょうが、母の気持ちも、この頃分かるような気がします。

京都は静かでいいですね。東京はあちこちでビルの建設や道路工事などで騒々しくて鬱陶しいです。もっともこれが日本が一層発展するための過程なのですから、文句を言うほうがおかしいですわね。

この前、四条大宮から嵐山へ行く時乗った電車、嵐電というのですね、箱一つの小さな電車が素敵でした。嵐山から御一緒させて頂いた時もそんな電車でした。帷子ノ辻、鳴滝、御室など、駅の名も京都らしくて優雅ですね。車窓からの眺めも、豊かな自然と古風な家並の風景が、こころを和ませてくれます。

母の心はいつも京都へ向いておりましたが、とにかく東京で頑張りました。

「苦労はしたが、あの頃は、なんだか充実していたような気もする」と言っておりました。過去を振り返るというのは、そんなものでしょうね。人生は過去があって、現在があり、そして未来へ続くのですから、自分の過去を否定したくはないですものね。

京子の手紙は、便箋の中程で中断し、次の便箋に書き次いでいた。

昨夜、書いているうちに眠たくなりました。今夜続きを書いております。今日は定時通りにお仕事が終わりました。残業や宴会場への派遣がなければ、朝十時頃から夜七時頃までの勤務時間です。週に一度はお休みが取れますが、土曜、日曜、祭日は原則として休めません。お店がとても忙しい日なので仕方がありません。

わたしが高校を出て働いていた頃、母と二人でよく音楽喫茶へ行きました。ロシア民謡や三高寮歌などを歌いました『紅萌ゆる』を母子肩を組みながら歌った時、周りの人々が合わせて歌ってくれて、盛り上がったこともあります。母は『星の流れに』を好んで歌いました。母の酒場勤めの頃の流行歌ですね。この中に歌われているような人たちが、母の酒場の客の中に幾人か居ました。「あの人たち、みんな、こころねの良い人ばかりだったのよ」と母は言っておりました。その中の通称　おけい”という人と、母は最も気心が合い、深夜よく飲みに行ったそうです。母と同じ年頃のおけいさんは、身の上の事は殆ど話さない人でしたが、母は、言葉遣いやしぐさから、良家の教育の高い令嬢の印象を受けたそうです。

星の流れに　身を占って
どこをねぐらの　今日の宿
すさむ心で　いるのじゃないが
泣けて涙も　枯れはてた
こんな女に　誰がした

歌詞もメロディもなんとも哀切ですね。『紅萌ゆる』と『星の流れに』は異質な組合わせですが、母の越し方を思うと、母の心情は理解できます。

ある夜、かなりおそくなってから復員兵の身なりをした客が入ってきました。母がカウンター越しに注文を受けた焼酎の茶碗を給した時、その人が、

奇声を発しました。
「お！おお、お…、里見香織さん！香織さん、じゃないか！」周囲の数名の客が振り向きました。母は、綻びた軍帽を被り日焼けした顔を見詰めました。
「まあぁ…、泉さん、泉隆行さんですね、よく御無事でお帰りでしたのね」
「あ、なんとか帰って来ましたよ、北越のことは…、北越の戦死は京都で知りました。安原も、残念だった」
「まあ、安原さんが…」
「うん、彼の戦死は東京で知りました、キリスト教関係で確実な情報を得ました。岡田と関口は元気です。共に復学し、今、大学院に居るはずです」
　他にも客が居るので長話は出来ない。母は接客の合間に、泉さんの前に戻り、懇願するように言いました。
「泉さん、ゆっくりして下さいね」
「あ、こちらに気をつかわなくていいですよ、勝手にやりますから」
　母は、看板まで居てくれた泉さんを、近くの、深夜までやっている飲み屋へ伴いました。泉さんは父とは同期でしたが学部は違いました。二人の交流の初めは母のカフェでした。泉さんと同学部の岡田忠雄さんと関口俊輔さんが加わりました。他にも常連の学生はおりましたが、安原さんも含めた五人は特に親交がありました。南方から、故郷の岡山に復員した泉さんは、すぐに京都へ行きました。大学で父の戦死を知りました。
　母は、泉さんから聞いて初めて知ったのですが、終戦直後、母を尋ねて来られた方は軍報道関係の人でした。その方は帰途、京都へ行き大学へ報告しました。泉さんは、その記録で父の戦死を知りました。ですから泉さんは、母の思いを知っていたのです。その時の事を回顧して母は言いました。「泉さんは、北越のことは…、と言って、しばらく母さんを、じっと見たの、母さんが軽く頷くと、北越の戦死は京都で知りました。と無念そうにおっしゃったの」
「大学はどうなさったのですか」との母の問いに、泉さんは自嘲するように答えました。「やめましたよ、目下闇商売に精を出しています、アメリカさんの横流しを農村で捌き、農産品を東京で売り歩き、暴利をむさぼっております、もう、学問する資格も気力もありません」
　母は、大学時代の泉さんの学究的な雰囲気を懐かしく思い出しました。
「そんなことあるもんですか！、泉さんは学問をなさるべき方です。二、三年遅れたって、いいじゃありませんか、大学に戻って下さい。これからの日本は泉さんのような方が必要なんです」
　母は、泉さんに、わたしの事を話しました。当時、父と母の恋に関しては仲間たちも認めていたようですから、泉さんも、母の打ち明け話を、驚くよりもむしろ祝福しました。
「そうでしたか、それは良かった、ただ、北越に知らせたかったなあ…」
「迷ったのですれど、必ずお帰りになる、と信じていましたから。泉さん、戦地では大変な御苦労だったでしょう」
「いや、僕なんかは要領良くやっていましたから、ちっとも」
　そう言う泉さんの表情に、母は、ほんとは極めて辛酸な体験をして来たのだ、と感じました。
　京都時代の話題になると、泉さんは笑顔を浮かべました。
「あの頃は楽しいこともあった。そうだ、みんなで比叡山へ登った時、香織さんが作ってくれた、おにぎり弁当の味は忘れられん、野戦の飯盒のめしをつついている時、よく思い出しました」
　それから半年ほどの間に、泉さんは母の酒場へ月に一、二度来てくれました。そして、ある夜、閉店直後、母たちが店内の片付けをしているところへ、泉さんが来ました。入口で店主さんへ会釈し、母を手招きしました。例の飲み屋で待っている、と言うのです。
　三十分程してから駆けつけた母は、びっくりしました。おけいさんと一緒なのです。すでに三人分の軽い酒肴が用意されたテーブルの前に二人寄り添うように腰かけていました。
「まあぁ、おけいさん！どういうめぐり会わせなの」母は眼を円くしました。
「この人と一緒に暮らすことにしたのだ」と泉さんが答えました。おけいさんは、はにかむように微笑みました。お化粧は薄く、身なりも地味にしていました。泉さんは続けて言いました。
「実はね、この人と付き合っているうちに、香織さんの話が出てね、香織さんが縁結びの神様だ」
「びっくりしたわ、でも私、嬉しい。おけいさん、よかったわね」
「あ、この人、中原真理子さん、という名だ」
「そうなの、私たち、幾度もここで飲んでお話したけど、ほんとのお名前は聞いてなかったわね。それで御結婚はいつなの」
「式は挙げない。明日、二人で岡山へ引っ越す」
「まあ、そんなに急に、お仕事はどうなさるの」
「家の農業を一年ばかり手伝う、それから大学へ戻る、二、三年はアルバイトをしながら、なんとか二人で頑張るつもりだ、同期の連中よりは数年遅れ

るが、なんとか学問でめしが食えるようになりたい」

「泉さんなら、きっとやれますとも。でもそんなに急がなくてもいいじゃないの、私、お祝いもさせて頂かないといけないわ」

「お気持ちだけでも有難い、香織さんには感謝している、どうか、お元気で」

「そんな、長いお別れみたいなこと言わないで」

母は、涙ぐんでしまいました。それを見て、真理子さんも、しんみりとした表情になりました。

「里見さん、あたしのような女に親切にして頂いて有り難うございました。御恩は一生忘れません」

「まあ、おけいさんまで、なによ、たいそうに。私たち、最良のお友だちだったじゃないの。淋しくなるわ、もう暫く居て頂戴よ」

母の古い日記帳などをめくりながら書いているのですが、今夜は妙にすらすらと書けます。

京子の手紙はここで終っている。明日また書き次ごうと思ったのだろう。高井は幾杯めかの冷酒を傾けた。いつの間にか店内が混んでいる。そのざわめきが急に意識に乱入してきた。席を立った。

すっかり夜になった界隈をぶらぶら歩いた。京子のぶらぶら歩きとは全く違う。ほろ酔い歩きの楽しい気分は無論無い。

四条河原町の交叉点へ出た。東へ直ぐに高瀬川、その小さな流れに沿って南へ少し歩く、浅い水面に夜の影を映した小さなビルの二階にデミアンという名のバーがある。高井が、もう十年も愛顧しているバーである。

「あら、タカさん、ひと月振りか知ら。もう大分飲んで来たようね」

カウンターの中からにっこりと迎えたママは、佐藤久実という。気さくな女性で、彼にとっては、バーのママというよりは女友達である。お互い、タカさん、クミさんと呼びあっている。彼よりは三つほど年下である。

若い女二人はフロアーのテーブルの数人の青年たちを接待し嬌声をあげている。高井が椅子に腰を下す。久実は彼のボトルで水割りを用意する。

「嵐山の人からの便り、その後どう?」高井は、ひとくち飲んで、ポケットから封筒を出した。

「その人亡くなったよ、交通事故だそうだ」

「え!、なくなったって?」

高井は、星宮芳枝の手紙を差し出した。久実が読む間、彼は京子の便箋を横に置き、グラスを傾けた。

「信じられないわ、最初のお手紙から読ませてもらい、タカさんの話を聞いたりしているうちに、里見京子さんという方と、とても会いたくなったの。今度京都へ来られた時は、紹介して頂こうと思っていたの、信じられないわ、まぼろしのようね。それが京子さんのお手紙?」久実は便箋を取った。

高井は久実の『まぼろし』という言葉に、はっ、とした。

まぼろし、まぼろし、幻影か、あれは幻影だったのか。

嵐山の風花の舞う中、川岸に佇み、流れを見つめていた女

天龍寺大方丈の結構を見上げていた女

嵐電嵐山駅前で出会った千代田襟の和コートの女

そして竜安寺駅近く、雪の小道を、鹿子絞りの裾の、藍地に白の文様を静かに揺るがせつつ遠去かって行った女

全て幻影だったのか。

携帯エッセイ30

「震災4」

災害は人間の性根を炙り出す。東日本大震災の翌日に多賀城市に取材に入った『日経ビジネス』の記者はこう伝えている。

「自転車に乗った若い男四人がユニクロ多賀城店の前で止まった。『ここに商品があるぞ』そう叫ぶと走り込んで行った」

阪神淡路大震災でも同じようなことがあった。

私の会社の入居ビルの向かいにあったプラダの商品が地震発生後まもなく全て盗まれた。

また、我が家の近くの銭湯は震災につけ込んで入浴料を値上げした。それでも長蛇の列が出来た。数時間も並んで入浴してきた息子はこう言った。

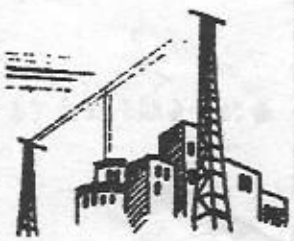
「大混雑のうえ、お湯は真っ黒だった。行かない方が良い」

一方、明石の駅前のビジネスホテルは、風呂を無料で市民に開放した。妻と娘が入りに行った。妻はこう言った。

「ええお湯やった。生き返ったわ。地獄に仏やね」

私はひと月も風呂に入れなかった。不快感で思考停止になった。そこで、カセット式のガスコンロで7時間程かけて湯を沸かした。そこまでしてでも風呂に入りたかった。

ところで、値上げした風呂屋の主人は毎回、市議選に立候補している。もちろん、当選したことはない。この先も当選することは無いだろう。《龍》



連載　女８０年の軌跡　眞糀さん

想い出の花見

よく考えてみると、長年住んでいるにもかかわらず、高槻で花見をした記憶がない。だからといって、桜の季節に、その姿を見ることなく過していたかというと、そうでもない。

ちょっと出かけていけば、あちこちに満開の桜。買い物のついでに、ちゃんと桜を見る機会があった。友人に聞いてみたら、

「あらたまって花見ってしたことないなぁ。」

という答えであった。

ただひとつ、鮮やかに思い出に残っているのが、クラス会で見た桜である。

やっと、のんびり出来る場所を見つけてゴザを敷き、テープをまわして、同級生音頭。

日頃踊った事もない人も、みんな楽しそうに踊っている写真を見て、ああ、この人もあの人も天国へ逝ったのか。あの踊りが最後だったのかと…。家庭生活から解放されて笑っている。

気分ウキウキ、花見どきになると見る想い出のアルバムである。

最後の言葉

「常日頃これが最後と心得て言葉を紡げ」芭蕉の教えには素通りできないものがある。

自分には俳諧の思想はわからないけれど、或る人はいう

「人生は自分のものなんだ。どう生きていこうと、好き勝手に生きたい。ただひとつ気になる事がある。年老いた母と、義母のこと。自分とは全く違った人生を歩いて来た二人を機嫌よく看取りたい」という。

やっと本音が出てきた。この点が、この人の持つ深い長所である。

私は、すかさず返す言葉をさがしたけれど、一蹴されてしまう。

新聞の犠牲者の一覧を読みつつ。残された家族は倒壊したガレキの中から、思い出の品々を、泥だらけになって掘り出している姿を見ると、夫と妻、親と子、教師と生徒、医者と病人、最後にどんな言葉を。

「ありがとう」

「がんばって勉強するんだよ」

「はやく快くなろうね」

「子供をたのむ」

手もとで何事かを語っているだろう、無くごとくに。

弘法さん

さて、古道具、骨董というと月に一度の弘法さん、天神さんの市を楽しみにしている人も多い。毎月二十一日は東寺で催される弘法さん、二十五日は北野天満宮である天神さん。

すみから、すみまで見て歩くのが好きで東寺へ参る。

アンティークな腰下げ時計を見つけた。私は、目利きでもなんでもないが、いくら古くてもロレックスなど買うのは無理だが、そこには中々雰囲気のいいアンティークな時計が並んでいた。二人の若い娘さんに交渉し値切って買った。

その後、どこへ行くにも必ず鞄の中に納まっているし、動いているのかも分からない存在だが時折、そうだ、と思い出して手触りを覚え、コッコッという音を聞く。なんちゅうこっちゃ、動いている

東寺へ参る度に、一回散策し、その店を探すけれど無い、とまあ、こんな思い出もあるので、見て楽しむ事を主眼にしている。冷やかして歩くのも長生きの秘訣かも。

『人気のデザイン』

9

紳士シャツ

＊

ひそかに人気の高い紳士物のシャツは、オシャレなだんな様はもちろん、肌ざわりにこだわりを持たれる方にも喜んで頂いてます。

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~

俳句

土田　裕

○　街路樹の陰うつくしき聖五月

○　サングラス六十路の妻が若返る

○　麦の穂の波のかなたに平城京

○　落ち椿数多くして鎮もれる

○　細切れに眠る齢や明易し

編集後記

震災から一月あまり経ちました。今回の被災は全ての面で甚大であり、途方もない時間と費用がかかる。

菅さんは、途方に暮れ立ち往生しているが勇断実行してもらわないと困る。時間が経つほど、経済的な損失が大きくなり回復が難しくなる。

つくづく思うが、選挙制度を見直しマトモナ政治家を選び育てるシステムを作らないといけない。名前を連呼するだけの選挙では、候補者の事が何もわからない。時間をかけて候補者と有権者が議論する選挙に変えないと政治家が育たない。（嘉）